昭和女子大学現代教育研究所紀要　第 7 号　75～85（2022.2）

《研究ノート》

「漢字アートコミュニケーション」による新しい「学び」の構築へ向けて（Ⅱ）

諏訪　兼久（現代教育研究所研究員）
松本　淳　（現代教育研究所所員　初等教育学科）
須永　哲矢（日本語日本文学科）

1．はじめに

文部科学省の新しい学習指導要領には「育成すべき資質・能力の三つの柱」という記載がある。それらは「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」[1]として示されている。更に、文部科学省は知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度に関するものの全てを、いかに総合的に育んで行くかという点においてアクティブラーニングを推奨している。このアクティブラーニングの重要な要素として、ベネッセ教育総合研究所は「生徒主体の学びのデザイン」[2]の中で「メタ認知」をあげている。

私たちがこれまで行ってきたメタ認知（自己理解）講座「漢字アートコミュニケーション」はこの「育成すべき資質・能力の三つの柱」に貢献できる取り組みと言えるだろう。

この「漢字アートコミュニケーション」はこれからの世界を生きる若者に必要な学びとなることを目指している。「初めて出会う出来事をどう捉えていくのか」「誰も答えを持っていないものに対してどう対応して行くのか」。そのような事態への向き合い方に必要不可欠な力を養うことができる可能性を「漢字アートコミュニケーション」は持っている。「漢字アートコミュニケーション」は自分の事態の捉え方を言葉にすることができ、さらに自分の奥に潜んでいる、一人一人のオリジンとも言える捉え方の発見に導くことができる。事態をどう捉え、それにどう道を付けて行くのか、その思考の鍛錬を「漢字アートコミュニケーション」では行っていると言える。まだまだ進化の過程ではあるが、誰もが「育成すべき資質・能力」を習得できる授業としての確立を目指したい。

本稿では、「漢字アートコミュニケーション」の第 6 回から第11回を通して、漢字 1 文字から出発した対話から自己理解につなげ、さらに「正解」のない問題に向き合う思考の鍛錬プログラムをどう構築していったのかを紹介し、受講生たちがそこから何を得たのかを検証していく。

2.「漢字アートコミュニケーション」の実施要領

まず、前稿で紹介した第 5 回までの「漢字アートコミュニケーション」の概要を確認する。その後、6 回目から11回目まで、どのようなプログラム展開をしたのかを紹介する。

2-1　第５回までの「漢字アートコミュニケーション」の概要と課題

第５回までのプログラムは、受講生が心に抱いた漢字を足掛かりに、講師との対話を通じて自分の考えを掘り起こしていくことを目指してきた。手順としての要素は主に以下の①～③で構成され、講師との対話相手となる受講生を交代させながら、これを繰り返すものである。①講師の諏訪との 1 対 1 のフリー対話方式で行う。他の受講生は傍聴。②受講生は黒板に用意した漢字を板書することで講師および他の受講生にテーマとなる漢字を告知。以降、対話の間、黒板にその漢字が見出しとして存在し、時にその文字の字形部分を指示、加筆などしながら対話を進める。③傍聴している学生も、対話の流れの中で外からの視点の提供として考えを語る機会を作る。

本アートコミュニケーションは、当初から明確なゴールを設定していたわけではなく、複数の要素を複合させた実験的な試みとして開始したものである。前稿で報告した第５回までは、プログラムの形式の基礎を定める準備段階であったと位置づけられる。ここまでは、漢字を通して「気づいていなかった自分の想いを掘り起こす」ということに主眼を置いてきたが、一方で「正解」のないことを考えさせることによる、「とらわれない思考」のトレーニングになる、という側面も明確になってきた。

そこで、思考力の鍛錬プログラムとしての側面も強化しつつ、自分の想いにたどり着けるような方法を模索する、というのが新たな課題となった。また、プログラム進行においても、まずは初対面の受講生との話を「広げる」ことに注力した結果、フリートークを展開できることは確認できたが、話が拡散してしまう傾向もみられたため、「収束させる」ことへの意識を明確に持つ段階に入った。一つのパッケージとしては、ある程度の変化を感じさせつつ、「きちんと収まった」と感じられるような形でプログラムを閉じられることが求められる。

これらの目的意識をもって、従来５回までに確立された基本形式に新たな試みを加えていった過程と、その効果の検証が今回の報告である。

表１　漢字アートコミュニケーション第５回までの形式と課題

	第５回まで（前稿）	見えてきた方向性（本稿）
内容面	自己の想いを知る	正解のない思考をするトレーニング（方法） ⬇ それを経て自己の想いを知る（一つの結果）
形式面	話を広げる	話を広げる ⬇……その過程での変化・多様な刺激 収束させる（プログラムとしての流れ・終了）

2-2 「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）の実施要領

第５回までの内容から大幅な変更をおこなったのが第７回および第８回である。なお、第10回、11回は、新型コロナ感染防止の観点からオンライン（Zoom）で行った。

対象：昭和女子大学の学生

実施日と参加人数

第 6 回：2019 年 5 月 21 日（9 名）
第 7 回：2019 年 7 月 2 日（5 名）
第 8 回：2019 年 12 月 10 日（4 名）
第 9 回：2020 年 1 月 28 日（2 名）
第 10 回：2020 年 8 月 3 日（3 名）
第 11 回：2020 年 8 月 29 日（3 名）
時間：一人当たりは 30 分程度
準備：受講者には事前に、「好きな漢字」「気になる漢字」一文字を考えてきてもらった。

第 7 回以降の手順：

以下に第 7 回以降の手順を示す。この回の変更にある程度の手ごたえが感じられたため、基本的に第 8 回以降もこの変更を引き継いでいる。

ラウンド 1（20 分）思考のトレーニングⅠ：既知情報を手掛かりに自分自身を考える
〈全体の流れ〉

自分の心に浮かんだ漢字（用意してきた漢字）をきっかけに、フリー対話方式で自分自身を見つめて行く。

① 講師の諏訪との 1 対 1 のフリー対話方式で行う。他の受講生は傍聴している。
② 受講生は黒板に用意した漢字を板書する。
③ 他の学生は基本的に傍聴しているが、諏訪の誘いで 1 回考えを語る機会がある。
④ 須永より「漢字の成り立ちと本来の意味」について、新たな視点導入を行う。
一人の受講生に対して、①～④を繰り返す。

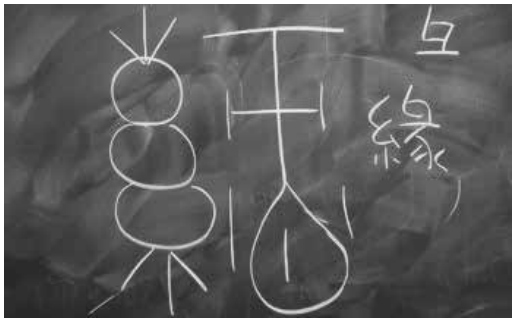
〈改訂点〉

①～③までは従来の手順を踏襲しており、その中でより良い形式を追究していったが、新たな要素として④を加えたのが大きな変更点である。本アートコミュニケーションを一つのパッケージとして考えたとき、トークのゴール地点が見えにくい、また、結局何を学んだのかが実感しにくい、という弱点を感じていた。漢字に対し、それを構成する各部分に注目しながらここはこうかもしれない、あるいはこうかもしれないと思考を自由に広げていくことが本プログラムの意義であり、例えば縦棒一本だけの部分でも、「自分の心を支える柱に見える」「動けないようにしている留め具のように見える」など、それぞれの想いに合わせて解釈の可能性は無限に広がる。しかし一方で、このような思考には正解がないゆえに受講生の心情としてはある種のフラストレーションも溜まりやすい。また、事実として各漢字には、その形が本来意味しているもの、つまりその限りでの「正解」は存在する。

そこで第 7 回から実験的に、自由に発想を広げるという頭の使い方とは別に、もともとその漢字はどのような成り立ちがあり、本来どのような意味をもっていたのかを、状況によっては情報として開示するという試みを行った。正解を与えてしまうというのは「正解のないことを考える」という本プログラムの根幹を揺るがしかねないため、導入には慎重さが求められたが、課外学習としてある種の知識を得ることを担保するとともに、トークの方向性、ひとつの「閉じ方」を規定することができる

という点を重視し、この見方が「正しい」というわけではない、という示し方に配慮したうえで導入することを選択した。

このパートはそれまでアドバイザー参加だった日本語学・須永が講師・解説として担当し、「漢字の成り立ちと本来の意味」を伝えることで、受講生が漢字を通して、さらに自分の考えや想像力を広げられるように新たな取り組みを入れた。



（「緑」成り立ち　板書より）

ラウンド 2（10分）思考トレーニングⅡ：正解のない問題への取り組み

第 8 回以降の新たな取り組みの二つ目として、2 部制の導入が挙げられる。従来の内容を（④を加えたうえで）ラウンド 1 とし、漢字の分析をして新しい感覚、想像性、見識を獲得した受講生に、さらにラウンド 2 として世の中にない「漢字」（創作漢字）に読みと意味を付ける課題を課した。「正解のない考え方をするトレーニング」ということが本プログラムの位置づけの一つとして明確化されたことを受けての実験である。

まずは考える入り口として、心に浮かんだ漢字について考えていく、というのが従来通りのラウンド 1 だが、そこで扱う漢字にはすでに読みも意味もあり、これまでの実験では、受講生がその既存の思考に縛られてしまいがちであるという点も見受けられた。そこでラウンド 1 で様々な角度での考え方を刺激したことを前提に、ラウンド 2 として、意味も読みもない創作漢字を用意しておき、その場で開示、受講生にはその場で読みや意味を考えてもらう、というトレーニングプログラムを考案した。

ラウンド 1 では、既存の漢字の意味や読みが、思考を開始する際の足掛かりになる。また、ラウンド 1 の漢字は自分で選んだ漢字であるため、そこには自分の想いや経験が思考を支えてくれる。そのような支えをもとに考え、思考が活性化した状態で、今度は支えの存在しない創作漢字について考えることで、未知の状況に対応できる思考力が鍛えられるのではないかと期待してのことである。

また、ラウンド 2 は完全に「外から与えられた漢字」であるため、自分の深奥とは直結しない。この点では、「自らの想いを掘り起こす」というのは従来どおりラウンド 1 が担い、メタ認知のための思考トレーニングの側面により重きを置くのがラウンド 2、というような位置づけでの補い合いを想定している。

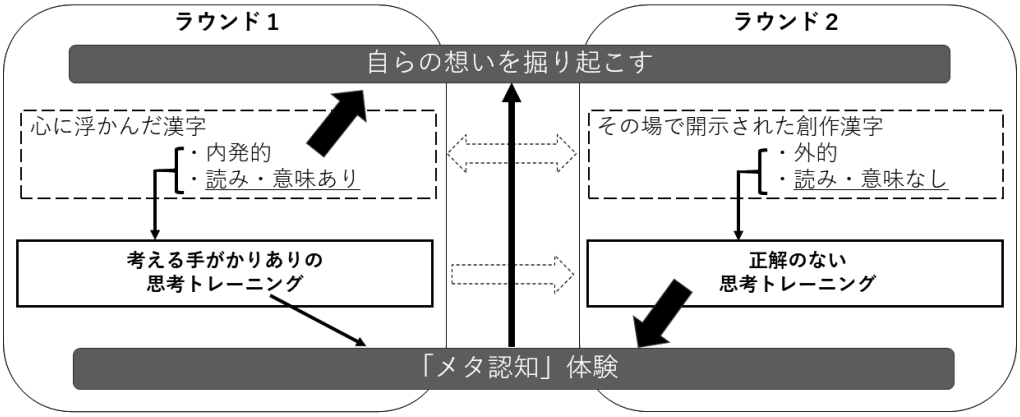


図 1　漢字アートコミュニケーション（Ⅱ）の 2 部構造

3 「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）の新たな取り組みの検証

ラウンド１、ラウンド２と新たな取り組みを加えることで、受講生の中に現れた変化を記す。

3-1. 分析力の向上

「漢字アートコミュニケーション」の対話を通していくと、受講者たちは漢字を「意味から」「形から」いろいろな部分を分析してゆき、目の前の漢字を様々な角度から分析することができるようになる。もともと「漢字」に対するイメージを持っているからできる分析ではあるが、受講者は初めての参加であっても全員が同じように自分が持ってきた漢字の分析をしていく。落ちこぼれが出ない。ここに「漢字アートコミュニケーション」の、授業としての可能性が見出される。

「漢字」は一つのアプローチに過ぎないが、受講者は漢字の分析を通して、日常的に起こる事象に対して想いを馳せている。以下にいくつかの学生のコメントを紹介したい。

『交』から想いを馳せる

今回私は、自分の今の状況や望んでいる状況として、「交」という漢字を選びました。「交わる」というのは、メの部分にしか注目していなかったのですが、元々の字を見てみたところ、 （人が足を組んでいる象形）というものであったと知り、「交」という漢字全てが意味を持っていると感じました。ただ人と交わるのは楽しいという思いで選んだ漢字でしたが、みんな人それぞれ沢山のコミュニティに所属していて、そんな中である１つの空間に集まったり、又は集まらない人もいたり、という風に解釈できたのが、自分なりに「交」という字の意味づけが出来た気がして嬉しかったです。

『進』から想いを馳せる

今回私は「進」という字を選びました。理由としては、今年大学４年生になり就職活動を通して将来のことを考える時間が増えたので、自分の思い描く未来に向かって一歩ずつ進んでいきたいという思いがあったからです。初め諏訪さんとの対話を通して、この漢字は右に真っ直ぐ伸びていくイメージを持ったのですが、須永先生に昔の漢字の形を教えていただき、様々な方向に進んでいるように見えました。私の中で「進」という漢字の新たな視点に気付かされました。

3-2. 他者視点での気づきの深まり

新たに「漢字の成り立ちと本来の意味」を知るセッションを設けたり、「創作漢字に読みと意味を与えるセッション」を設けたりすることにより、受講生により多くの他者視点が入るようになった。

「漢字アートコミュニケーション」の特徴の一つとして、受講生は他の受講生の話を聞くことができ、他の受講生の漢字に対しての自分の考えを述べる機会が持てる。受講生が共通して感じていたのが、他の参加者の話を聴くことで、新たな示唆や洞察、自分との違いを知ることができるよい機会になっていたことだ。受講生一人の発見が周りに影響を及ぼしている点もこの「漢字アートコミュニケーション」の特徴であると言える。受講生にとって、他の人の自己理解の過程が抵抗なく自分の中に入っていくことが見受けられた。その特徴的な声を以下に示す。

「他の受講生の漢字についても聞きながら、自分の考えを考えることができ、多くの考えに触れることがで

きました。漢字の解釈やそれぞれの受講生の考えの違いが、とても勉強になりました。」

「他の人の話を聞いていると、自分の考えとは全く違った意見が多くありました。普段、あまり人と話をしないので、コミュニケーションから見えてくるものの大切さを知りました。」

「一つの漢字を解釈するのにも皆それぞれ違った見方をしていて、興味深かった。見方は何によって変わるかは、それぞれの人の心情や気持ちで変わってくると感じました。」

3-3.　視点の多様化

今回、新しく取り入れたのが「漢字の成り立ちと本来の意味」だ。この視点がいかに受講者にとって、漢字の洞察や想像性に影響を与えたかを示す。その一例として、多空間的な視点導入が加わったことが観察された。

例えば『爽』を取り上げた受講生がいたが、受講生は中央の「大」の部分を、手を広げて立っている人のイメージで考え、他のパーツを意味づけしていった。しかし、この漢字は本来、棺の中に横たわっている人を表していたという。このことを知らせることで、この漢字を上から見る視点が導入された。自分と昔の人で見方がどう違うか、ということを示せば、同じものに対し、実感を持って視点を変えるという体験が容易にできる（図2）。

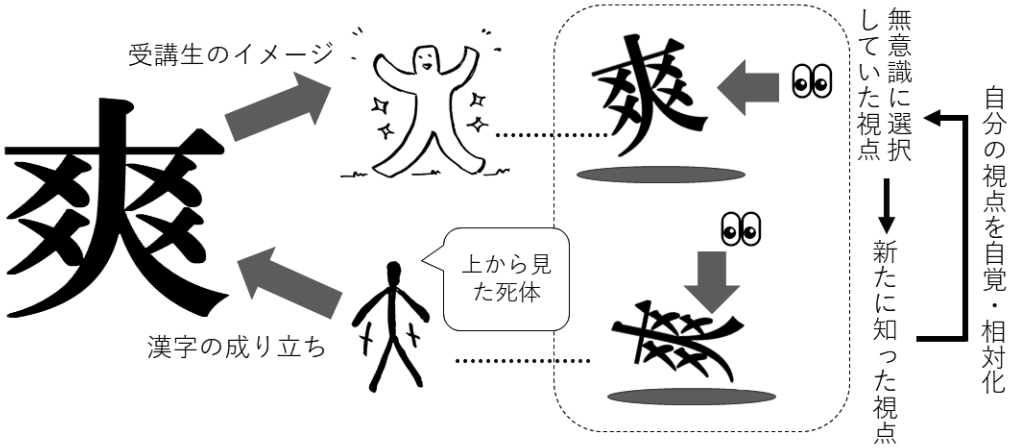


図2　文字に対する視点転換の例

他者の視点を導入することの重要性は、当初から感じてはいたが、講師もしくはほかの受講生が「ひょっとしたらこうかもしれない」という意見を提示しても、その考え自体も途中で頓挫してしまうこともあり、考え方が合わなければ受け入れられない場合も多い。それに対し、事実としての文字の成り立ちを提示するという情報提供は説明としての一貫性があり、一つの考え方として受け入れられやすい。導入当初「正解」を与えてしまうことに対する懸念はあったが、実際の運用では「あくまで昔の人はこう考えた、というだけで、こう考えるのが正しいというわけではない、自由に考えていい」という形でこの情報の位置づけを伝えた結果、思考を閉ざしてしまうようなことはなく、むしろ

形式としてプログラムは収斂し、内容としての思考は活性化させる効果が得られたように思われる。このように受講者は漢字の成り立ちや本来の意味、もともとの形を知ることで、漢字を立体的に見られるようになり、新しい想像が自分の中で拡張していった。

3-4．より高次な思考を意識的にする実習へ

漢字の成り立ちに関する情報提供と同時に、新たに加えたのがラウンド 2、創作漢字である。これまで、既に意味や読みをもっている漢字を対象としてきたが、それは「自分自身の想いを掘り起こす」という観点からは、無自覚のうちに自己を 1 字に凝縮するともいえ、自己理解への有効なアプローチであると考えられる。一方で、本プログラムに思考トレーニングとしての側面が見出されて以降、より純粋にトレーニング性を高めた方法を模索した結果、考案されたのが「創作漢字に読みや意味を与える」というトレーニングプログラムである。従来、自己認識を深めることは目指せても、アートコミュニケーションを通じて身につけた頭の動かし方を実際に使ってみる、という体験部分は希薄であった。そこで「外から降りかかってきた正解のない対象について思考をめぐらす」という実地体験訓練の小さな一歩として、読みのない漢字に自由に読みを与えるというプログラムを設定した。

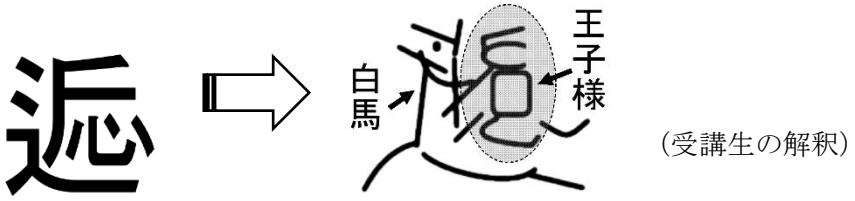


図 3　創作漢字の例

図 3 は創作漢字の例であるが、創作漢字をデザインするにあたっては取り入れる要素の配分を意識した。具体的には（A）意味が読み取れる文字的部分、（B）へん、つくりなど、カテゴリー的な意味を含む部分、（C）意味がとりにくい図形的部分、を織り交ぜる、という点である。図 3 であれば（A）が「心」、（B）がしんにょう、残りの部分が（C）にあたる。このような要素を織り交ぜることにより、それぞれの受講生の思考傾向の違いが見られるようになる。

ラウンド 1 はひとりずつ、20 分程度の交代制で行うが、このラウンド 2 はさほど時間をかけず、受講生全員が一斉に自身の読み、およびそのように考えた根拠を発表しあう形式である。（C）の図形的に、「絵」として見る認知パターンが強い学生もいれば、（A）の、意味を足場に意味の組み合わせで認知しようとする学生もいる。受講生同士がお互いの考えに触れることで、ただ「そういう考え方もあるんだな」という感想を越えて、思考パターンを自覚する契機としても機能することが明らかになった。慣れてくるとあえて既存の考えから離れようという考え方を試す受講生も出てきて、「心」の部分を「こころ」と読むことを意識的に忘れ、純粋に図形として見ようとする、などの姿勢が見られた。図 3 については「王子様」という読みを与えた受講生がいた。しんにょうを馬に見立て、王子様が馬に乗っているように見えた、とのことだったが、この例などはすでに知っている意味をあえて離れ、視点を変えて自由に考えてみる、ということが実現した好例と言えよう。

このようにある種の競技性を取り入れることで、漢字アートコミュニケーションのプログラムも、実習・演習性が備わり、さらにラウンド1からの自己理解・他者理解を再度深める機会を設けることができたのではないかと考えている。

3-5.「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）を通しての思考の変化

上記に示した1から4の過程を通して、受講生には漢字を通して思考・価値観の変化があらわれていた。

人は、それまでの人生を通して身につけてきた物事に対する評価・価値観・先入観を持っている。漢字一文字においても同じことが言える。漢字には、意味があり、その意味がどのようなものなのかを覚えてきた中で、実生活を通して具体的な体験をしてきている。すでに、この場に持ってきた漢字には、その人なりの色が付いているのだ。その漢字に対するイメージを基軸にして対話してゆくと、新しい概念を自分の中から生み出して行く。受講生たちは「こんな考えをもっていたのか」「こんな気持ちが抱けるのか」と新しい体験をして行った。ここに特徴的な声を以下に示す。

『鮮』という漢字をもってきた受講生は、最初には「べったりとした強烈なイメージ」を持っていた。魚へんがあまり好きではなかったと。しかし、漢字を通して対話を深めて行くと魚へんが「キラキラした光のいっぱい差し込んだイメージ」に変わった。そして、自分は「鮮やかな人生を歩んで行きたいなぁ」と自分の想いや考えを自己理解するに至った。

音楽が好きな受講生が『音』という字を持ってきた。『音』という漢字を通して、自分が音楽の何に魅力を感じて、どう演奏したいのかについて考えることができ、改めて音楽というものが好きだということを再認識した。この対話を通して、何かに焦点をあてて考えを広くしても良いし、逆に何かを見えないようにしても良い、どちらでも普段とは違う見方ができることを発見した。

4．総括―「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）の「学び」の可能性について

「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）が目指したものは、漢字を介在として「初めて出会う出来事をどう捉えていくのか」「誰も答えを持っていないものに対してどう対応して行くのか」といった未知なる事態への向き合い方をトレーニングする「学び」の場を作ることであった。

そのプログラムにおいて、従来から新しくなったことは、①学生が持ってきた漢字に対して、「漢字の成り立ちと本来の意味」を知るセッションを設けたこと、②「創作漢字」に読みと意味を与えるセッションを設けたことである。その詳細は、本稿の第2章で述べた。

この項では、「漢字アートコミュニケーションⅡ」における「学び」の可能性について総括してみたい。

4-1 「正解」のない問題に向き合って

「正解」を求めることに慣れている受講生たちは、「正解」のない答えを生み出していくことに最初、戸惑いを感じることもある。しかし、他の受講生の発想を聞いていると、「そんな発想があるのか」「そう考えてもいいのか」と思えてきて、だんだん自分を縛っていた「正解を見つけなければなら

ない」との想いから解放されてゆく。そして、漢字 1 文字から色々な想像を巡らせていく、また見たこともない創作漢字を前にして「こうも読めるのではないか」「ああも考えられるのではないか」と思考の回転を始めるようになるのである。

さらに、同じ受講生が複数回、この漢字アートコミュニケーションのセミナーに参加することが出来れば、たとえ 1 回目の参加時に創作漢字を前にして思考がうまく働かなかったとしても、2 回目、3 回目では、自分なりの読みと意味を創出することが出来るようになってくる。それは、日常生活において経験したことのないことに出会っても、「こう考えてみたらどうだろうか」「他にどういう見方があるだろうか」と想像力を働かせて、物事を多角的にとらえる力を育むことにつながっていくのだと思う。

そして、これまでは、本セミナーは実験プログラムとして 3 名程の受講生を対象に実施して来ているが、仮に30名の受講生がいたとして、一つの創作漢字に30通りの読みと意味を与えることが出来たとしたら、色彩豊かな世界が展開されるのではないだろうか。そのことが、他者理解、自己理解をより一層深めることにつながる可能性があると考える。

4-2. 「感想シート」から見えてくる「学び」の可能性について

「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）を用いた対話を通して、受講生たちが何を見出していったのかを、各回終了時に受講生が提出した感想シートからみていく。

〈自分の本当の願い、これからの自分の課題を発見することができた〉

「育」という漢字から自分の「教育」へ対する想いを再確認し、その過程の中で新たな教師観を得ることが出来ました。また他の受講者の考えもとても興味深く、新しい価値観を共有できたように感じます。今回のセミナーに参加することで、漢字の元の意味、自分の本当の願い、これからの自分の課題を発見することができました。（選んだ漢字：【育】）

〈多様な考え方、捉え方ができるように前向きに考えることができた〉

漢字の対話によって自己理解を深めるだけでなく、漢字の知識についての学びも多く、とても興味深かったです。漢字の解説やそれぞれの受講者の考えの違いを知ることができ、とても勉強になりました。その違いを知ることで自分と他人の違いについて強く感じることもありましたが、その違いを否定的に捉えず、それぞれの良さと捉えるという考えがとても印象的でした。自分は実際に、「自分は堅い考えしかできない」とマイナスに考えてしまっていたのですが、それも自分の良さであり、この機会に多様な考え方、捉え方が出来るようになろうと前向きに考えることができました。（選んだ漢字：【結】）

〈自己認識が出来た〉

自分の選んできた漢字の雰囲気やパーツで分けて説明して「自分はこんなことを考えているんだ。」と認識できたり新たな発見ができたりしてとても楽しかった。自分だけではなく他の学生の意見も聞くことができ、他の漢字も見たりしてたくさん考えさせられた。漢字に何か意味づけることに正解はないが、もともとの旧字体などを教えてくださって自分の知識にもなった。実際にない漢字も自分で解釈して読むことも面白かった。（選んだ漢字：【希】）

上記の感想から、「漢字アートコミュニケーション」（Ⅱ）は、教師が一方的に「何か」を学生に教える授業ではなく、学生自身が何を考えているのかを知り、他の学生のさまざまな異なる考えに出会うことにより、自分の考えをさらに深めたり、広げたりする「学び」の時間となっていたことがわかる。それは、「正解」のない問題に向き合ったからこそ出来た「学び」の時間だったのだと思う。

5．おわりに―新しい「学びの場」の創造を目指して

本稿を書くに当たって、「漢字アートコミュニケーション」の第 6 回から第 11 回の学生の感想を読み返してみた。その中で心に残ったものがいくつかある。

「先生と一対一でこんなに自分の考えていることを聴いてもらうという機会はあまりないので貴重な機会だった。」

明治 4 年に文部省が作られて、明治 5 年に学制が発布され日本全国に小学校が作られ、それから約 150 年の間、日本の学校では一斉教育が行われてきた。それは効率的な学習成果をあげることに寄与したと思われるが、一人ひとりの子ども、生徒の可能性を開花させるには限界もあったのかもしれない。彼女の感想は、これからの教育へ示唆を与えるものであるとも思えた。また、上記と関連して、次のようなコメントも心に残った。

「もっと自分がもってきた漢字について諏訪さんとお話をしたいと終えた後思った。」

学生は、話をしたがっている。何年か前にオーストラリアからの留学生が日本の女子学生の間の話題が「彼氏の話とショッピングの話」が95％で、政治の話も経済の話もなく、話をしてもおもしろくない、と言っていたことがあった。しかし、上記の感想を読むと、本当は色々な話をしたいのだが、そういう機会に恵まれてこなかっただけなのかもしれない、と思えてきた。「漢字アートコミュニケーション」を体験した学生たちが、漢字を出発点にして自分の世界を語るようになったら、留学生たちも「おもしろい」と感じるだろうと思った。

「知」という字を持ってきた学生は、以下のように記していた。

「『知る』ってどういうものなのだろうと哲学的な問いが生まれました。多分、帰り道は「知」という字をずっと考えていると思います。」

この感想を読んで、もし子どもたちが学校で新しい漢字を学ぶたびに自分の世界を広げていくことが出来たら、楽しいだろうなと思った。

上記の事柄は、今回のテーマである「正解」のないものに向き合うこととは直接関係がないかもしれないが、今後新たな「学び」の場を作るにおいて大切な視座をもらった気がした。

漢字 1 文字から出発してこれまで 11 回実施した「漢字アートコミュニケーション」において、「コミュニケーションを図る」「自分が何をしたいのかを見出す」「昔の人の考えに触れる」「正解のない問題に向き合う」「想像性を育む」等の展開をして来た。今後は、実生活とのつながりを持たせるこ

とも含め、「学生の可能性をどう開花させることが出来るか」のさらなる探求をしていきたい。

最後に、これまで「漢字アートコミュニケーション」に参加してくれた学生たち、様々に協力や支援をしてくださった方々にお礼を申し上げたい。

参考文献

1　文部科学省「新しい学習指導要領等が目指す姿」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm　検索日：2021 年 9 月 1 日

2　ベネッセ教育総合研究所「生徒主体の学びのデザイン「アクティブラーニングを活用した指導を評価研究」 https://berd.benesse.jp/up_images/research/kyoken-al-kenkyu-ss.pdf　検索日：2021 年 9 月 1 日